はじめに

本講義は早稲田大学や上智大学をはじめとした難関私立大学合格を目標とする講座です。

難関私立大の現代文といえば

「文章が難解で読んでも理解できない」
「選択肢が微妙で迷ってしまう」

というものです。しかし、論理的構造分析を身につけ、論理のルールに従って解答していけば、全ての問題に根拠をもって解答することができるのです。

「難関私立大の現代文は難しい」
という常識を覆すのがこの講義です。

本講義を終えたとき
「周りがほとんどまともな対策をしない現代文こそ、差をつけることができる科目だ」
と思えるように講義をしていきます。

この講義で、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

①　文法
②　構文
③　論理

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

柳生　好之

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ映像を見るだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして設問に解答してください。

本講義では「制限時間あり」で60％を目標として解答してください。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　**問題を解く。解答の根拠をメモしておく。**

Ⅱ　講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、各チャプター後に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。**ただし、本文に線を引くのは構いません。**

講義ポイント	講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント	復習ポイントを覚える。解答を書き直す。

難関私立大　現代文対策講座　目次

第一講　「差異」と「類似」を読む …… p.8
第二講　「論理」を読む …… p.20
第三講　「論証」を読む …… p.42
第四講　傍線部内容説明問題解法 …… p.70
第五講　傍線部理由説明問題解法 …… p.86
第六講　空所補充問題解法 …… p.102
第七講　文整序問題解法 …… p.122
第八講　内容真偽問題解法 …… p.142

巻末付録
読解法一覧 …… p.162
傍線部内容説明問題解法 …… p.182
傍線部理由説明問題解法 …… p.185
空所補充問題解法 …… p.193
脱文補充問題解法 …… p.194
文整序問題解法 …… p.195
内容真偽問題解法 …… p.196

第一講「差異」と「類似」を読む　30分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

時間とは、人間の営みから独立して不断に、それゆえどこでも、誰に対しても平等に、過去から未来へと一定の速度で流れてゆくものであり、人は決してその時の流れに逆らうことはできない。時間の中に社会があるのであって、社会の中に時間があるのではない。どんな社会もこの時間の流れから逃れられないことは、諸社会、諸文明の(イ)コウボウを描く歴史や年表も示している通りではないか。近代人の常識的な時間像とは、おそらくこんなものだろう。

　だが、この常識は、私たち自身の時間意識を振り返っただけで、容易に［　　］することができるはずだ。たとえば「昨日の今頃」とか「先週の今日」、「来年の今頃」といった表現をする時、私たちにとって時間は過去から未来へと直線的に流れるものというよりも、一定の周期で反復するものとして了解されている。「また新しい年がやってきた」とか「日はまた昇る」と言う時、そこでは時間は一定の速度で流れ去ってゆく透明で空

虚なものではなく、繰り返し更新される質的な属性をもつものとしても捉えられている。「週」や「年」といった区分は、現在でもイスラム諸国やユダヤ教の人びとが異なる暦を使っていることからもわかるように、時間の人為的な区分であり、構造化である。不断に流れる時を測定する単位としての時・分・秒もまた、その人為的な区分であるに過ぎない。

　哲学者のエルンスト・ユンガーは『砂時計の書』の中で、日時計、砂時計、機械時計は、それぞれ質的に異なる時間を表示していると述べている。日時計が示すのは天体の運行に基づき、自然環境に内在する宇宙的時間である。それに対して砂時計は、砂が落下し尽くすまでにかかる一定の時間を、自然から切り離されたものとして提示する。砂時計が示す時間は、連続的な砂の流れが示すように持続的で分割されてはおらず、また、その砂時計が置かれた周囲で、砂時計の砂が落ちつづける間しか意味をもたない時間である。だが、機械時計になると時間は時・分・秒の単位に細かく分割され、ゼンマイや振り子によって継続的にその時を刻み、時計台や懐中時計などの普及によってそうした時間が都市や地方、国家などに普遍的なものとして行き渡るようになる。日時計、砂時計、機械時計では、それぞれが示す時間の形態が異なっており、そうした時が人びとの営みにとってもつ意味も、それが果たす社会的な機能や役割も異なっていることが分か

るだろう。

実際のところ、自然界には「時間」などというものは存在しない。そこに存在するのは事物の持続や変化だけである。そのリズムや周期、間隔などを人間が記述し、把握しようとする時、そこに「時間」という形式が〝発明〟され、動員される。時間はそれを測定し、それによって世界を分節して知覚する人間存在なしには存在しない。

『砂時計の書』の時間論は、時間という形式が一方では日時計のように、自然環境に内在する存在としての人間がその環境と関わる時に見出されるものであること、と同時に他方では砂時計や機械時計のように、社会の内部で行為や関係を調整しようとする際に見出されるものであることを示している。また、日時計、砂時計、機械時計という形態は、自然の(ロ)リツドウと共に反復する時間と自然から切り離されて一定の方向へ不断に流れてゆく時間、持続として現れる時間と数量的な単位の積分として現れる時間といった、質的に異なり、時に対立すらする時間の様相が存在することを示している。こうした時間の異なる様相は、空間の場合と同じく、人類学や歴史学、宗教学や哲学などの多くの研究によっても示されてきた。

時間が自然なものではなく、人間が世界と関わる際に見出され、利用されるものであるとすれば、様々な社会に見出される時間の様々な様相は、

そうした時間を用い、それによって自然環境や共在する人びととの関係を調整する社会のあり方の違いに対応しているはずだ。

　たとえば現代日本の社会学者・真木悠介は、人間にとっての時間の形式を「可逆性としての時間／不可逆性としての時間」「具象的な質としての時間／抽象的な量としての時間」という二つの対立軸によって構成される、「可逆的で具象的な〈反復的な時間〉」、「可逆的で数量的な〈円環的な時間〉」、「不可逆的で具象的な〈線分的な時間〉」、「不可逆的で数量的な〈直線的な時間〉」の四つの類型に整理している。真木によれば、(1)可逆性としての時間は、原始的な共同体のように昼夜や季節を繰り返す自然的な世界に人間存在が内在している社会形態に対応し、不可逆性としての時間は、都市文明のように自然に対して人間存在が自立し、あるいは(ハ)ソガイされた社会形態に対応している。また、具象的な質としての時間は、労働や祭礼などを通じて他者との具体的な共同性に人びとが内在する社会形態に対応し、(2)抽象的な量としての時間は、近代的な分業や市場経済などを通じてそうした共同性から人びとが自立し、あるいはソガイされてゆく過程で人びとの関係を調整する媒体として現れてくるという。

　このように捉えるならば、抽象的な数量としての時間が過去から現在へと不断に流れつづけるという近代人の時間意識は、人間存在が自然からも、

具体的な他者との共同的な関係からも自立し、あるいはソガイされた社会形態としての「近代」に対応しているのだということができる。機械時計によって刻まれる、抽象化され、数量化された時間を媒介にして、近代は具体的な場所や環境を超えて、互いに直接現前しあうことのない他者との間にまで社会的な協働連関を広げてゆく。近代を特徴づける社会形態としての資本制も国民国家も市民社会も、こうした時間を仲立ちにする人びとの共在として現れるのである。

「歴史」という、現代人にとって社会や世界を理解する上で不可欠な了解の形式も、社会の特定の形態の成立との関係なしには存在しえない。

原始的な部族社会に代表される、レヴィ＝ストロース※の言うところの「冷たい社会」では、社会も世界も不可逆的な時間の流れと共に変化してゆくものではなく、神話的な起源やアニミズム※的な秩序によって構造化された、時の流れに対して不変で、くりかえし再生し回帰するものとして捉えられている。そこでは重要なのは「変化」ではなく「変わらないもの」であり、社会は不可逆的な変化をできるかぎり排除することによってその同一性を維持しようとする。社会の形態はきわめて緩慢にしか変化せず、その結果、冷たい社会には事実上も、人びとの意識においても、「歴史」がほぼ存在しない。

だが都市文明が成立し、自然環境に対して大規模に働きかけ、戦争や交易などの社会的な交流や支配階級のコウボウが始まると、社会は時の流れと共にその形態を変化させてゆくものとして捉えられるようになる。社会は循環する自然の時間や、閉鎖的で共同体的な紐帯から切り離され、変動を自らのうちに取り込み、歴史の温度が高まった「熱い社会」が出現する。文字による記録がそうした社会の変化を書き留めるようになると、(3)そのようにして書き記された「歴史」が社会を理解する基本的な枠組みとして機能し始めることになる。

（若林幹夫「時間の形態と社会の形態はどのように関係しているのか?」による）

※注　レヴィ＝ストロース……フランスの社会人類学者（一九〇八～二〇〇九）。アメリカ先住民の神話研究で有名。

アニミズム……生物、無機物を問わず全てのものに霊魂が宿っているという考え方。

問一　‖線部(イ)〜(ハ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書で記すこと）

問二　―線部の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

問三　空欄［　］にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なものを一つ選び、番号で答えよ。

1　概念化　　2　構造化　　3　相対化

4　体系化　　5　普遍化

問四　――線部(1)について。この時間を示すものはどれか。左記各項の中から最も適当なものを一つ選び、番号で答えよ。

1　日時計　　2　砂時計　　3　日時計と砂時計
4　機械時計　　5　砂時計と機械時計

問五　――線部(2)について。この時間を示すものはどれか。左記各項の中から最も適当なものを一つ選び、番号で答えよ。

1　日時計　　2　砂時計　　3　日時計と砂時計
4　機械時計　　5　砂時計と機械時計

問六　――線部(3)について。これはどのような意味か。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　構造化された社会では、時間は人間の営みから独立して一方向に流れていくため、そこで起きた事象を記すことが文明の発展に役立つということ

2　都市文明が成立し、自然環境に対して大規模に働きかけることは、社会の中に時間を置くことを意味するということ

3　時の流れと共に形態を変化させていくものとして社会を捉える都市文明では、その動態の記録が社会を理解するための手掛かりとなるということ

4　社会は時の流れに対して可逆的であり、そこで起きた戦争や交易などの社会的交流を記した書物は後世の人々にとって指針となるということ

5　都市文明が成立した社会では、人々は閉鎖的で共同体的な紐帯から切り離され、「歴史」を理解することが社会を構成する一員として不可避だということ

問七 左記各項のうち、本文の趣旨と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　時間とはそれ自体が自然の中に存在するのではなく、人々が世界と関わる際に見出すものである。

ロ「週」や「年」などは時間の人為的な区分であり、線分的に流れる時を測定するための単位である。

ハ　具象的な質としての時間は、祭礼などを通じて自然環境の中に人間が内在する社会に現れる。

ニ「近代」においては、時間は互いに接触することのない人々の分業関係を調整する媒体となっている。

ホ　どのような社会であっても、時は過去から現在へと流れて社会の形態は変化する。

問一

(イ)

(ロ)

(ハ)

問二

問三

問四

問五

問六

問七

イ	ロ	ハ	ニ	ホ

テキスト解答

第一講 「差異」と「類似」を読む　解答

問一

イ	ロ	ハ
興亡	律動	疎外（疏外）

問二 ちゅうたい

問三 3

問四 1

問五 4

問六 3

問七

イ	ロ	ハ	ニ	ホ
1	2	2	1	2